

氷の副社長に㊦任務で
溺愛されています

有允ひろみ

Hiromi Yuuin



エタニティ文庫

目次

氷の副社長に㊦任務で溺愛されています

5

書き下ろし番外編
とろあま
蕩甘ダーリンな副社長と㊦作戦で奸活をしています

333

氷の副社長に㊟任務で溺愛されています

「えらい事になった！」

佐藤芽衣は、社長室のドアを閉めるなりそう呟いた。

廊下を足早に歩き、非常扉を開けて外階段の踊り場に立つ。

「私みたいな平社員にできるかな？ いや、できなくてもやらなきゃだよ！」

そう口にする芽衣の身体が、ぶるりと震える。

「うわっ……これって、武者震いってやつ？ ちょっと、落ち着かないと……。今は階段を駆け落ちて怪我なんてしてる場合じゃないんだから」

芽衣は非常階段の手すりをしっかりと持ちながら、慎重に階段を下り始めた。

佐藤芽衣、二十五歳。

大学卒業後、都内にある大手化粧品メーカー「エゴイスタ」に入社し、すぐに広報部に配属された。

広報部は部長をトップに七人の社員がおり、芽衣はその中で一番の年下であり下っ

端だ。

それゆえに、回ってくる業務は主に雑用で、自分が主体となつてする仕事は、まだ一度もした事がない。

そんな芽衣が、五月の連休明け早々に社長室に呼び出され、井川優子社長直々に特別な業務を仰せつかった。

曰く――

『我が社の常務取締役副社長である、塩谷斗真の密着取材をしてちょうだい』

塩谷斗真とは、井川社長の一人息子だ。苗字が違うのは、両親が離婚して父方の姓を名乗っているからであるらしい。

今年三十五歳になる彼は、ビジネスにおいては他の追随を許さないほど優秀であり、将来は会社のトップに就くと目されている。

いわば、斗真は「エゴイスタ」の未来を担う人物であり、社長とともに八千人ほどいる社員すべての期待を背負う方なのだ。

『これは、私からの特命――いわばあなたに課せられた一大プロジェクトよ』

『どうせなら、仕事面だけでなく、プライベートも掘り下げてみるといいわね』

『取材に協力するよう、私から副社長に言っておくわ。とりあえず、どんなふうにプロジェクトを進めるか、できるだけ早く計画書を出してちょうだい』

優子は微笑んでそう言い、激励の言葉をかけてくれた。

つまり、副社長を公私にわたり取材して、それを社内報に載せる、という指令だった。提示された取材期間は一カ月。

つい一時間前までは、こんな大役を任されるなんて夢にも思わなかった。

けれど、指名されたからには必ずやり遂げて、期待に応えたい。

(憧れの社長から、直々に依頼されるなんて嬉しい〜！)

「エゴイスタ」は日本を代表する化粧品メーカーであり、創業二十一年と社歴は浅いものの、すでにその名は広く知られ世界中に愛用者がいる。

思い起こせば三年前の春――

本社にいる新入社員全員が一人ずつ社長室に呼ばれた。

待っていたのは、優しい微笑みを浮かべる優子その人で、彼女は大きく両手を広げて新入社員を歓待し、手を握り目を見つめながら「これから一緒に頑張っていきましょうね」と語りかけてくれたのだ。

優子は「エゴイスタ」の創業者であり、現在五十八歳。品があり凜として美しい彼女は、日本を代表する女性経営者として以前からメディアによく顔を出していた。

もともと入社前から優子に憧れていた芽衣は、それを機にいつそう彼女のファンになり、尊敬の念を抱き続けているのだ。

(井川社長からの特命だなんて……。きっとこれは一生に一度あるかないかの大チャンスだよ。だけど……)

芽衣の実家はよくあるサラリーマン家庭で、自身もごく普通の庶民だ。

そんな自分が、いきなり雲の上の人の取材をするなんて、それだけでも腰が引けてしまふ。

それに加えて、塩谷斗真は次期経営者として有能であるのもちろんの事、頭脳明晰で化粧品の開発者としても超一流であるエリート中のエリートだ。

彼が「エゴイスタ」に入社して以来、業績は右肩上がり。手掛けた商品は、すべて某コスメティックサイトで上位を獲得し、消費者の信頼も厚い。

おまけに、超がつくほどの美男で、そこにいるだけで周りがたじろぐほど強いオーラを纏っている。

しかも、性格は冷淡で毒舌だという噂だ。

気軽に近づけるような相手ではないし、ましてやプライベートまで掘り下げた取材を本当にさせてもらえるかどうか……

考えれば考えるほど、不安になってくる。

果たして彼は、自分のような平社員を相手に、まともに受け答えをしてくれるだろうか？

だいぶ前になるが、芽衣は社内のエレベーターで一度だけ斗真と乗り合わせた事があった。挨拶したが、高身長あつさつの斗真に対して、芽衣の身長は一六〇センチに満たない。周りには何人もの社員がいたし、存在に気づいてもらえる可能性はゼロに等しかった。けれど、エレベーターを降りる間に、彼が何気なく芽衣のほうを見た。

時間にして一秒にも満たなかったように思うが、芽衣はその美形ぶりに心底衝撃を受けた。

おそらく、向こうは覚えてすらいないだろう。しかし、芽衣にとってはかなりインパクトのある出来事だったし、今もなお記憶の中にはつきりと残っている。

あれほど美男でハイスベックな斗真だ。当然恋人になりたがる女性は引きも切らないし、噂では世界を股にかけて活躍するトップモデルや女優もその中にいるとか。

(だけど、それもこれも噂の域を出ないし、副社長って、いろいろとミステリアスだよ) 社内でも特に女性から注目を浴びている彼だが、直接仕事で関わる者は役職者に限られているし、プライベートについては謎に包まれている。

しかし、斗真が稀に見る優秀なビジネスパーソンであるのは間違いなく、だからこそ多くの社員が彼に興味を持ち、実際はどんな人物なのか知りたいと思っているのだ。かくいう芽衣もそのうちの一人だし、今や広報部員としての使命もある。

階段を下りる足を止め、芽衣は拳を硬く握りしめた。そして、空を仰いで力強く宣言する。

「この仕事を見事やり遂げて、万年雑用係から脱出するぞ！」

突き上げた拳が陽光を浴びて、きらきらと輝いて見える。

芽衣は大きく深呼吸をしたあと、意気揚々と自席に戻るべく階段を駆け下りるのだった。

「エゴイスタ」が入っているビルは、日本有数の繁華街の中心から少し離れた位置に建っている。

七階建ての建物の一階は自社製品を扱うブティックになっており、社員は日々消費者を身近に感じながら業務に励む事ができる仕組みだ。

ビルは外壁内装ともに会社のイメージカラーである白をメインとした色使いが施され、化粧品メーカーにふさわしい清潔感のある外観になっている。

街中を探しても、これほどスタイリッシュな建造物は他にない。

中でも芽衣のお気に入り、まるでアメリカのソーホー街にある建物のような独特の趣がある事はないものの、まるでアメリカのソーホー街にある建物のような独特の趣がある。

『佐藤さん、一階搬入口に荷物が届いています』

二階受付から内線が入り、芽衣は急いで四階にある広報部からエレベーターで建物の裏手にある荷物搬入口に向かった。

業者から荷物を受け取り、台車を押しながら四階に戻る。届いたのは、今月分の社内報だ。

広報部では、毎月十日頃に社内報を発行している。

主な目的は、社員に対して会社の経営理念や事業戦略を的確に伝える事。それと同時に、経営者を含めた社内でのコミュニケーションを活性化させるという役割も担っている。聞くところによると、もとは井川優子社長が個人で発行していた、いわば私信のようなものだったようだ。しかし、会社の規模が大きくなって、広報部が設立されたのを機に社内報の発行は同部署の担当業務になった。

以来、十五年にわたって全社員の手元に届けられている。

芽衣は、広報部の隣に位置する総務部横の社内向け郵便ボックスの前で台車を止め、部署ごとに冊数を確認しながら社内報を仕分けていく。いささかアナログなやり方ではあるが、毎回楽しく読んでもらえる事を願いながら配っていた。

(これで、今月分の社内報の配布は終わりっ！)

とはいえ、全員が内容をくまなくチェックしているというわけではないし、八年前から同時配信しているウェブ版社内報の閲覧数も伸び悩んでいた。

広報部では社員の反応を知るために、常時紙面でアンケート調査を行っている。

それによると、閲覧数が伸び悩んでいる最大の理由は、記事に面白みがなく知りたいと思う情報と掲載内容に大きなズレがある事だとわかった。

これについては、早急に改善策を講じようと話し合っていたところに、今回の「副社長密着取材」の話が持ち込まれたのだ。

部内は大いに盛り上がり、芽衣は皆に「広報部の期待の星」と呼ばれるようになった。(きつと一筋縄ではいかないだろうけど、ぜったいにやり遂げる！)

皆の期待に後押しされ、芽衣はますますやる気アップさせている。

もともと、簡単にへこたれる自分ではない。

全力を尽くし、必ずや結果を出してみせる——芽衣は、そう固く決心していた。

「部長、これから社長のところに行っちゃいます！」

特命を受けた翌週の月曜日、芽衣は取材計画書を手に社長室に向かった。

作るにあたり、アンケートの内容を充分に加味し、この取材が成功すれば社内報の閲覧数がアップする事間違いなしだ。

広報部のアンケートでは、社内報の感想や要望はもちろん、会社に関するちょっとした疑問や質問なども受け付けている。

とはいえ、社内報への期待が下がっている中、アンケートの回答数もかなり少ない。そんな中、少し前に「井川社長に聞く」と銘打って優子の特集記事を組んだところ、それまでないほど多くの反響があった。

「社長の事がよくわかった」「また社長の特集を組んでほしい」など、送られてきた回答も多く、今でもウェブ版で歴代一位の閲覧数を誇っている。

もともと美意識の高い社員が多い「エゴイスタ」だ。

美しく年を重ねる優子に対する関心は高く、第二弾の特集記事の企画も進んでいる。

そしてもうひとつ。その記事の中に、一枚だけ副社長である斗真が写っている写真が交じっていた。

それに、驚くほどの反響があったのだ。

「副社長、さすがのかつこよさですね」「血は争えないという感じ」「副社長の写真、引き伸ばしてパソコンの背景にしたい」「他にも副社長の画像、ないんですか？」

などなど、以後の回答でも、斗真の写真への感想の他、「今度は副社長の特集記事を組んでほしい」という要望が多数届いた。

広報部としては社員の声を無視できず、一度副社長秘書の黒川くろかわを通して斗真にお伺いを立ててみた。しかし、斗真は秒で企画を却下し、せっかく集まった要望は企画会議にかける前に見送られた。けれど、それからも斗真に関する要望は、アンケートを通して

充分すぎるほど集まっていた。

(アンケートの回答の中で誰かが書いてたっけ。「副社長は自社の枠を遥はるかに超えたワールドクラス級のイケメンです!」「副社長ならハリウッドデビューも難しくないでしょう」って)

身につけているものはどれをとってもゴージャスかつシック。女性のみならず、男性社員も斗真に興味を持つのは、そんな彼のインフルエンサー的吸引力もあってだと思われる。

あれこれと考えつつ七階の役員用のフロアに下り立ち、社長室のドアをノックした。

許可を得て中に入ると、優子が微笑みを浮かべながら芽衣を迎え入れてくれる。

「思ったよりも早かったわね。やる気があつて結構よ」

「はいっ、社長のご下命ですから、張り切つて準備させていただきました!」

応接セットのソファに導かれ、彼女と向かい合わせに座る。

憧れの優子を前に、芽衣は緊張の面持ちで企画書を提出した。

彼女はそれを受け取り、時折頷きながら読み進めている。

表紙にデカデカと「塩谷斗真副社長密着取材企画案詳細」と印字された企画書には、大きく分けて三つの項目が書かれている。

・その一、副社長って、どんな生活をしているの？
 ミステリアスなイメージがある副社長の私生活を可能な範囲でつまびらかにし、質問を交えながら社員知りたいポイントを深掘りする。

・その二、副社長のワードローブを拝見！

副社長のファッションに対する考え方やポリシーを伺い、クローゼットのラインナップと、特にお気に入りのものを紹介する。

・その三、副社長のプライベート、ここが知りたい！

お気に入りの場所や店など、副社長のとっておきを紹介。実際に現地を取材し、副社長の人となりを徹底調査する！

若干ノリが軽すぎると思わなくもないが、アンケートの回答をすべて盛り込んだ結果、こうなった。

それに、せっかく任されたのだから、多少なりとも自分のカラーを出したいという思いもある。

「いいわね。とても面白いと思うし、私自身も、これが記事になるのが楽しみだわ」
 「ありがとうございます！」

優子のお墨付きをもらい、芽衣は満面の笑みを浮かべた。

「副社長は、『冷淡』で『毒舌家』で『気難しい』——そんな話を、佐藤さんも聞いた

事があるでしょう？」

優子が指折り数えながら、そう訊ねてくる。

「は……はい。ですが、私は直接お話しをした事ありませんし、本当のところはどうなのかわかりません」

実際そうだし、芽衣は昔から人を見かけや噂だけで判断しない主義だ。

「その考え方、とても素晴らしいわ。是非、佐藤さん自身の感性で副社長がどういう人間なのか判断してちょうだい。きっとそれが、いい記事を完成させる事に繋がると思うわ」

優子が、ふんわりと笑った。

その笑顔につられるようにして、芽衣もにっこりする。

「彼には、確かにそういう傾向があるし、扱いづらいところもあるわ。辛辣しんれつな言い方をするし、物事を斜めに見ていたりする。ビジネスにおいては鬼のように厳しいし、研究に関しては完璧を求めるあまり寝食を忘れがちね。でも、本当はとても優しい子なの」

最後の言葉を発した時、優子が目尻を下げて微笑んだ。

「この件については、私が全面的にバックアップするし、ここに書かれているものはすべてやってもらって構わないわ。たぶん、彼から多少の不満は上がると思うけど、ぜんぶ社長命令という事で片づけてちょうだい。——黒川室長、ちょっといいかしら？」

優子が秘書室に内線で連絡し、副社長秘書の黒川富夫とみおを呼んだ。

ほどなくしてやって来た黒川が、芽衣を見て軽く頷いた。そして、優子に促されて彼女の隣に腰を下ろす。

「副社長への取材については、黒川室長にもすべて把握しておいてもらうわ。もちろん、私同様取材には全面的に協力するから、何かあれば必要に応じて彼に相談してね」

優子より三つ年下の黒川は秘書室長を務めており、彼女から厚い信頼を受けているようだ。

「わかりました」

芽衣が頷くと、優子もまた満足そうに頷いた。

「いろいろ大変だと思うけど、頑張ってね。佐藤さん、あなたには期待してるわ。是非、ここに書かれているとおり、副社長をとことん深掘りして」

握手を求められ、芽衣は前のめりになってそれに応じた。

握った優子の手は思いのほか小さい。しかし、掌からは並々ならぬ熱量が伝わってくる。

「はい、承知いたしました！ 佐藤芽衣、心して社長の特命を実行させていただきますー！」
 社長室を辞したあと、黒川に相談して、取材は明後日からスタートさせる事になった。
 優子から、とても面白い企画だと褒められ、取材中の不満はぜんぶ社長命令で片づけたいという言葉をもらった。

これ以上力強い後押しはない。事実上、芽衣は「社長命令」という免罪符を手に入れたのだ。

(それにしても、さっきの笑顔は素敵だったなあ)

優子はビジネスにおいて、他の追従を許さないほどの辣腕を振るう。しかし、物腰や口調は柔らかで、常に微笑んでいるイメージがあった。

けれどさっき、彼女が自分の息子について語った時の微笑みは、今まで見た中で一番柔らかで優しくかったように思う。

優子の期待に応えるためにも、彼女が優しいと言った塩谷斗真、という人の本質をしっかりと見極め、記事に反映させてみせる。

(よし、やるぞー！ 塩谷斗真副社長、待つてくださいいね！)

イケメン副社長だからといって、容赦なんかしない。

芽衣は、非常階段で己の士気を上げてから自席に戻り、企画がすべて通った事を上司に報告した。

いよいよ、明後日から密着取材がスタートする。

芽衣はウキウキした気分で、やりかけていたファイリングの仕事に取り掛かるのだ。

その二日後、芽衣は意気揚々と出社して、早々に斗真の秘書である黒川に内線電話をかけた。

優子に言われたとおり黒川は非常に協力的で、芽衣が訊ねる前に斗真のここ一週間のスケジュールを教えてくれた。

それによると、斗真は今日、午前中いっぱい会議に出席し、午後は取引先などを訪問するために外出する予定らしい。

芽衣は黒川と相談の上、会議終了後に今回の企画の顔合わせを兼ねた打ち合わせの時間を設けてもらう事にした。

時計を見ると、あと十分で会議が終わろうとしている。

芽衣は席を立ち、広報部部長の相田のデスクに向かった。

「佐藤芽衣、副社長の密着取材に行つてまいります！」

芽衣が小さく敬礼をすると、相田もそれに応えて同じポーズを取る。

「よろしく頼むよ。社長直々の依頼だ。これが成功すれば、広報部の未来は限りなく明るくなる」

現在五十八歳の相田は、優子が「エゴイスタ」を立ち上げた頃からの古参社員だ。芽衣と同じで明るく前向きな彼は、今回の大抜擢を自分の事のように喜び、応援してくれている。

「任せてください！」

芽衣は、にっこりと微笑み、くるりとうしろを振り返った。見ると、部内の同僚達が、残らず芽衣を見て頷いてくれている。

「頑張れよ」

「期待してるぞ」

課長の武田が声を上げ、主任の西と佐川がそれに続く。

広報部のメンバーは、ぜんぶで六名おり、芽衣以外の全員が男性で、主任以上の役職者だ。

「京本くんには、連絡をしましたか？」

「はい、昨日メールを送って、返事がきています」

京本という男性主任は、一昨日から妻の親族の祭事に出るため有休を取っており、明日出社する予定だ。彼は部内でカメラマンを担当していて、今回の取材でも、必要に応じて同行してくれる事になっている。

「では、ご挨拶に行つてまいります！」

芽衣はそれぞれの視線に応えながら広報部をあとにする。途中、更衣室に立ち寄り、ロッカーから外出用のバッグを取り出した。鏡の前に立ち、そこに映っている自分を隅々までチェックする。

「エゴイスタ」には制服がなく、優子の方針により社員達は常識の範囲内であれば比較的自由にファッションを楽しむ事ができる。

芽衣も化粧品メーカーの社員らしく、トレンドから外れない恰好をするよう心掛けていた。

ただ、もともとの感性に難があるのか、好みの着こなしをすると、なぜかアンバランスになる傾向にある。

何事も最初が大事だ。

今回の企画が無事に終わるまでは、我流のファッションは封印しようと思った。

急な事で洋服を新調する暇はなかったが、手持ちの中から一番フェミニンなクリーム色のワンピースを選んだ。メイクも普段より念入りにし、髪の毛も整えてきた。

(これで少しは女らしく見えるかな?)

しかし、服装はともかく、顔立ちは大きく変えられない。

芽衣は目と鼻が丸っこく、どちらかといえば童顔だった。そのせいもあり、あまり派手なメイクは似合わない。だが、色白なのでルージュを引くだけで充分と言えなくもなかった。

肩までの緩いウェービーヘアを指で梳き、眉の位置で綺麗に切り揃えた前髪を整える。(メイクよし、服装よし。準備オッケー!)

芽衣は襟元のフリルを摘まんで形を整え、鏡の中の自分に向かってコクリと頷いた。社長室に呼ばれた時もそうだったが、平社員の芽衣は役員クラスの部屋に行くと思うだけで緊張してしまう。

「社長命令」という免罪符を持っているとはいえ、雲の上の存在である斗真を相手にするのだ。そう思うと、いやが上にも緊張する。

(もう少し、副社長の人となり事が事前にわかっていればなあ……)

取材に先駆けて、秘書の黒川から斗真の簡単な経歴を教えられていた。

それによると、斗真は幼少期より優秀で、中学三年に進級するタイミンクで渡米。同国のセカンダリースクールに入学し、卒業後は帰国して国内最難関の大学に入学したそう。六年間、化学とバイオテクノロジーについて探求し、卒業後は再度渡米して世界的に有名な製薬会社に入社。そこで二年間さまざまな研究成果を上げたのちに退社し、「エゴイスタ」に入社した。

しかし、芽衣が知っていたかった斗真の内面については、やんわりとはぐらかされ、なんの情報も得られずじまいだった。

『私は佐藤さんのサポートをする立場ですが、これ以上の情報は、かえって取材の邪魔になりますので』

なるほど、それも一理あると納得した。

今回の案件は、社長自ら斗真に伝えているそうなので、安心して取材をスタートできるし、過剰に心配するのもよくないだろう。

（せっかくの、キャリアアップのチャンスだもの。ぜったいにいいものにしてみせる！）自分に気合を入れ直すと芽衣はおもむろに両肩の上下運動をして、目や口を大きく開けたり閉じたりし始める。

社長室を訪ねた時もそうだったが、大事な局面の前には、芽衣は必ず顔中の筋肉を動かして心の緊張を緩めるのだ。

たまたまそうしている時の顔を見た人は、もれなく「変顔」と言って笑うが、芽衣は至極真面目に取り組んでいる。

「あ、え、い、う、え、お、あ、お。ば、べ、び、ぶ、べ、ぼ、ば、ぼ——」

小さく呟きながら表情筋を動かし、それが済むと足早に更衣室を出て廊下を歩く。

目指す副社長室は七階にある。

芽衣は誰もいないエレベーターに乗り込み、目当てのフロアに下り立つ。一歩進むごとに、緩んだはずの緊張が再びジワジワと高まってくる。

緊張の度合いは、社長室に向かう時よりも格段に高い。

芽衣は無意識に表情筋をほぐしながら、副社長室のドアの前に立った。そして、ノックしようと拳を前に振り下ろした途端、ドアが開いて握った手が何か柔らかなものに当

たる。

「え？」

目の前にあるダークグレーの壁を見つめながら、芽衣はパチパチと目を瞬かせた。よく見ると、自分の手が触れているのはスーツを着た男性の胸元だ。

芽衣はあわててうしろに下がりがりながら男性の顔を見上げた。

「ふ、副社長っ！」

「部屋の外でおかしな呻き声でしたから何事かと思えば……人の執務室の前で百面相か不機嫌そうに顰めた眉と、射るような目つき。

それでいて、正面から見た斗真の顔は、一言では言い表せないほど魅力的だった。図らずも胸がときめいてしまい、芽衣は咄嗟に頭を下げて挨拶をした。

「お、お初にお目にかかります！ 広報部の佐藤芽衣です！ 社長直々の命を受けて、副社長の密着取材をさせていただく事になりました！」

「ああ、その話か」

斗真が眉間に縦皺を寄せながら、そう言った。

「とりあえず、中に入れ。話はそれから」

彼は、いかにも面倒そうな表情を浮かべて芽衣を部屋の中に招き入れる。

「失礼します」

芽衣は一礼して中に入り、促されるまま黒革の応接セットのソファに腰を下ろした。斗真がテーブルを挟んで、芽衣の正面に座る。これほどの美男と接した経験がない芽衣は、瞬きをするのも忘れて彼の顔に見入った。

「君もとんだ災難だったな。芸能人じゃあるまいし、僕のプライベートなんか誰が興味を持つというんだ？ 記事を書いても、骨折り損のくたびれ儲けになるのが関の山だ」

斗真に企画をバツサリと切り捨てられるなり、芽衣は思わず立ち上がって大きく首を振る。

「そんな事はありません！ 社内報のアンケートでは副社長に関する要望がどっさり届いているんですよ」

芽衣は両手を大きく広げて、量の多さを示した。

「僕に関する要望とは？」

斗真が指でソファを指して、立ち上がった芽衣に座るよう指示する。

「はい。たとえば、着ているスーツやネクタイはこのメーカーなのか。お気に入りのブランドとか……あと、好きな女性のタイプは、とか——」

「くだらない。それを聞いてどうする？ もっと建設的な質問かと思えば、低俗すぎて答える気にもならない」

話の腰を折られ、芽衣は秒速で怯んで固まる。彼の冷やかな言動は、あつという間

に芽衣のやる気に冷水を浴びせかけた。ビジネスにおいては鬼のように厳しいと聞いているので、こういった質問を快く思わないだろう事は予想していた。

芽衣は、出鼻をくじかれたままではいられないとばかりに奮起する。

「副社長は『エゴイスタ』全社員の注目の的なんです！ ビジネスパーソンとしてだけでなく研究者としても超一流の副社長は、我が社の誇りであり、社員の憧れの存在です。だからこそ、いろいろな事を知りたいと思うし、知る事で副社長をもっと身近に感じられるようになるんだと思います」

芽衣は斗真の冷めた視線に対抗するように、声を大きくする。

「会社は、ひとつの家族——これは、社長が『エゴイスタ』を創業した当初から掲げてきた社訓なので、副社長もよくご存じだと思います。社員が副社長を深く知る事で距離が縮まり、会社という家族の結束が強くなる……社長は、そうお考えになって今回の企画を私に依頼してくださいなんです。そういう事ですので、お忙しいとは思いますがこれからどうぞよろしくお願いいたします！」

話し終えても、斗真は不機嫌な表情のまま、芽衣を見つめている。その視線の強さと冷たさに内心で震え上がりながらも、芽衣は彼から目を背けなかった。

（目を逸らすな！ 今、逸らしたらこっちの負け！）

そんな芽衣のしつこさを厭わしく思ったのか、斗真が表情をいっそう険しくして口を

開いた。

「ふん……好きにしろ」

彼は、そう言うなりソファから腰を上げた。

「ほんとですかっ!？」

「本当だ。以後、僕の答えをいちいち確認するのはやめろ。二度手間になるし、時間の無駄だ」

斗真がぐるりと背中を向けると同時に、芽衣は勢いよく立ち上がって声を上げた。

「承知しました——つてか、やった！ 副社長の許可、しっかりいただきました！」

「うるさい！」

自分では抑えたつもりだったが、思ったよりも大声を出してしまったみたいだ。

一喝され、芽衣はすぐに振り上げた両手を下ろし、その場でかこまった。

「すみません！ つい——」

「ここは山の中じゃなく執務室だ。今のようにやたらと声を張るのはやめてくれ。神経に障る」

デスクに着いた斗真が、強い視線で芽衣を睨みつけた。

芽衣は極力小さな声で「はい」と返事をして、小さくなる。

「君が提出した企画書を見たが、いろいろと問題がありすぎる。取材内容がくだらない

週刊誌並みに低俗だし、君がやろうとしている事は、まるで芸能人を追いかけ回すパパラッチと同じだ」

斗真が、テーブルの上に置いてあった企画書を指で弾いた。

「ですが、ささほどお話ししたとおり——」

「君の言い分はもう聞いた。同じ話を繰り返すのもやめろ。理由はさつきと同じだ」
びしゃりと言われ、芽衣は即座に口を閉じた。

はじめが肝心だというのに、これ以上機嫌を損ねたら、今後の取材に支障をきたしかねない。

「まったく馬鹿馬鹿しい。ただでさえ忙しいのに、一カ月もこんな幼稚な企画に付き合わされるとはな。社長の意向だから、取材は許可する。ただし、僕の半径三メートル内には入るな。大声を出されるのは迷惑だし、不要なオーバーアクションも目障りだ」
強い口調で言われ、芽衣はさすがに目を伏せて返事をするだけに留めた。

勢い込むあまり、いろいろやらかしてしまったらしい——

(失敗した……)

芽衣が反省して肩を縮こめた時、開いたままになっていたドアの向こうから黒川が入ってきた。彼はにこやかな顔で二人の真ん中の位置で立ち止まる。

「まあまあ、ここは穏やかに行きましょう。社長から仰せつかった密着取材です。佐藤

さんが意気込むのは当然ですよ。ねえ、佐藤さん」

「は、はい……」

芽衣は、顔を引き攣らせながらもなんとか笑顔を作った。一方、斗真の顔には苦虫を嘔み潰したような表情が浮かんでいる。

「社長から、あなたの提出した企画書を見せていただきました。とてもいい内容だと思いますし、是非これに沿って副社長を公私にわたり暴きまくってください」

「黒川！」

「はい、副社長」

黒川が手に持った企画書を振って、にっこりする。斗真よりも二十歳年上の秘書は、直属の上司のしかめっ面をさらりと受け流す術を心得ている様子だ。

「よかった！ 黒川室長、感謝しますっ」

思った以上に力強い味方の存在に、芽衣は救われた気持ちになる。

「……もう勝手にしてくれ」

斗真がそう呟き、諦めたようにため息を吐いた。

「承知しました。さて、この件に関しては、私も社長から話を伺い、企画のスムーズな進行を見守るよう言われております。まずは、取材にあたって大まかなルールを決めておく必要がありますね。副社長、企画書はご覧になりましたね？ 佐藤さん、一応ここ

で読み上げてくれますか？」

「は、はいっ……！！」

黒川に企画書を手渡され、芽衣はそこに書かれた文字を読み始める。

「その一、副社長って、どんな生活をしているの？ その二、副社長のワードローブを拝見！ その三、副社長のプライベート、ここが知りたい！ あの、もし可能であれば、塩谷斗真副社長に聞く百の質問！ をプラスさせてください——以上です」

芽衣が読み終えるなり、斗真が呆れたような顔でフンと鼻を鳴らした。

その直後、デスクのそばに立った黒川が、大きく頷く。

「いいですね。すでに社長の承認も得ている事ですし、百の質問も合わせて、このままスタートして問題ありません。副社長、取材に際しての注意事項はございますか？」

芽衣は黒川とともに、デスクについている斗真を見た。

「確認するが、取材と称して僕の自宅に押し掛けてくる気か？」

斗真が企画書を指で突きながら、そう訊ねてきた。

ついさっき「うるさい」と言われてしまった芽衣は、声を出していいものかどうか躊躇する。

すると、それを察した黒川が、芽衣に向かって微笑みかけた。

「大丈夫ですよ。副社長は威圧感がありますが、こう見えて結構優しい方ですから」

黒川がそう言い終えるなり、斗真が拳でデスクを叩く鈍い音が聞こえた。

「黒川！」

「ははっ、すみません、余計な事を言いました。佐藤さん。副社長の質問に答えてあげてください」

軽く笑い声を上げると、黒川が芽衣に向かって話すよう促してくる。

芽衣は企画書を手にはデスクの正面に向かい、そこで立ち止まった。

「と、当然、副社長のご自宅も取材させていただきます。そうでなければ、密着取材とは言えませんし、ワードローブを見せていただくには、そうする必要がありません。もちろん、お邪魔する際はカメラマンとして男性社員が同行しますので、その点をご心配なく——」

「ちよつと待て。その点とは、どの点だ？」

斗真が訝しそうな顔で口を挟む。

「えっと……私も一応女性ですので、副社長と二人きりになるのは、よろしくないのではと——」

「その心配は無用だ」

斗真は、そう言うも芽衣の全身に視線を走らせる。

「たとえ、密室に二人きりで閉じ込められるような事態に陥っても、君が心配するよう

な事には決してならないから安心したまえ」

失礼な！

さすがに今のは、カチンときた。

なるほど、美人でもなくスタイルもイマイチな芽衣を相手に、色っぽい間違いなど起こりようがないという事だろう。

だが、いくら立場に天と地ほどの差があろうと、今の視線は失礼すぎるのではないだろうか。

けれど、斗真の機嫌をこれ以上損ねては、元も子もない。

芽衣は、強張りかけた顔を笑顔に変えると、努めて冷静な態度を装った。

「ですよね。では、もしカメラマンがなんらかの理由で同行できなくても、安心して取材を敢行させていただきます！」

若干言い方に棘があったかもしれないが、このくらいの反撃は気にも留めないだろう。案の定、彼は特に反応する事もなく、再び話し始めた。

「取材に際しての注意事項だが、仕事中はもちろん、プライベートでも極力僕の視界に入らないようにしてくれ。必要以上に話しかけたり、気が散るような行動を取るのも禁止だ。それと、目障りだから、そういう意味もなくヒラヒラした恰好は今日を限りにやめてもらいたい」

斗真が芽衣の服を指さしながら、キツパリと言いつつ放つた。「承知しました。では、明日からは黒子のようにひっそりと、なおかつピツタリと副社長に張りついて取材をさせていただけようと思います」

芽衣も負けじとそう言い返し、にっこりする。

「とにかく、できる限り早く終わらせるように。時間をもったいない」

どうしてこうも突き放すような物言いをするのか――

思っていた以上の塩対応に閉口しつつ、芽衣はどうか憤る気持ちを抑え込んで「はい」と返事をした。

「わかったなら、もういいだろう。黒川、出かけるから車の準備をしてくれるか」

そう言ったとき、斗真はもう芽衣を見ようともしせず外出の準備を始めた。

冷遇の次は、無視を決め込むつもりらしい。

「かしこまりました。佐藤さん、では明日からよろしくお願いします」

黒川に見送られ、芽衣は副社長室をあとにした。

急ぎ足で廊下を歩き、エレベーターホールを突っ切って外階段に続くドアを開ける。

「何よ！ イケメンだからって偉そうに！ せつかく、おしやれしてきたのに目障りだなんて失礼しちゃう！ほんと、感じ悪い！」

芽衣は怒りに任せて、一步一步踏みしめながら階段を下りていく。

外見に惑わされ、うっかりときめいてしまったのは一生の不覚だ。しかし、これほどわかりやすく冷淡な対応をされると、むしろ清々しい気もしてくる。

「そっちがそうなら、こつちだつて遠慮なくいかせてもらいますからね！」

芽衣は立ち止まり、さつき目の当たりにした斗真の顔を思い浮かべた。そして、さらに悪態をつこうとして、なぜか頬が熱くなつてあわてる。

腹が立つし、これまでに会った人の中で最上級に感じが悪い人であるのは確かだ。

けれど、美男なのは否定できないし、まっすぐこちらを睨みつけてきた目力の強さには参った。

「悔しいけど、認める。あんなにかっこいい人、他にいない……」

とはいえ芽衣は面食いではないし、男は顔ではなく内面が大事だと思っている。いずれにせよ、こちらの予想どおり取材は一筋縄ではいかなそうだ。

それでも、決して途中で投げ出すまいと心に誓う芽衣だった。

次の日から、芽衣の「副社長密着取材」が本格的に始まった。

昨日同様、朝一で黒川秘書に連絡し、副社長のスケジュールを確認する。それによると、今日の斗真は、自宅から直接取引先に向き、出社は午後二時の予定だそうだ。その後は一時間ほどデスクワークをこなし、午後三時から市場調査に向かうらしい。

スケジュール調整の結果、芽衣は午後の市場調査に同行し、そこから取材をスタートさせる事になった。

『出かける前に、一度社長室に寄ってください』

黒川にそう言われ、芽衣は指定された午後二時四十分の五分前に席を立ち、七階に向かった。歩きながらジャケットの皺しわを伸ばし、掌てのひらで髪の毛を撫でつける。

（着慣れないから落ち着かない……。でも、取材が終わるまでスカートは封印するって決めたんだから）

芽衣は今日、ダークグレーのパンツスーツを着ている。

普段はスカートを穿く事が多いが、ヒラヒラはやめろと言われてたため昨日急遽デパートで購入したのだ。

髪の毛は耳の高さでまとめてお団子にしているし、メイクは最小限にして、ルージュも落ち着いたベージュブラウンにした。

（なんだか、前にドラマで見た女性SPみたいじゃない？）

そう思ったら、心なしか背筋がシャキツとする。

これで準備はバッチリだ。

ただ、取材に同行する予定だった京本が、出社を前に体調を崩し今日も有休を取って休んでいる。これについては、黒川を通して斗真と優子に報告済みだ。

（一日目だし、とりあえず今日のところはカメラマンなしでもいけるよね）

一人二役になるが、もともと自分でもオフショット的な写真を撮るつもりでいたし、問題はないだろう。エレベーター内の鏡の前で表情筋をほぐしたあと、社長室の前に立つてドアをノックする。

「どうぞ」

促うながされて中に入ると、優子が部屋の窓際に立って観葉植物に水をやっているところだった。

デスクの横には黒川が控えており、互いに挨拶あいさつを交わす。

「いらつしゃい。あら、今日は、雰囲気あまぎが違うのね。もしかして、副社長に何か言われた？」

「はい、ヒラヒラした恰好はやめるように、と」

「だから、そんな勇ましい恰好あやうしをしているのね。でも、それはそれで素敵よ」

「ありがとうございます！」

優子に褒められた事が嬉しくて、芽衣は晴れやかな笑みを浮かべた。

「今日は午後から副社長と出かける予定だそうね。取材、頑張ってください」

「はい、心して取り掛かります」

水やりを終えた優子が、芽衣をソファに誘導する。

黒川は彼女の斜め前に、芽衣は優子の正面に座り、背筋をピンと伸ばした。

「副社長とは、昨日はじめて会話したって感じかしら？」

「はい、そうです」

「どうだった？ 噂どおりのいけ好かない人だったでしょう？」

「い、いえ……そんな——」

「隠さなくてもいいわよ。今のあなたの顔を見れば、昨日副社長がどんな対応をしたのか想像がつくわ」

「えっ？ 顔っ……」

芽衣は、自分の顔を手で触った。

昔から感情が顔に出やすいと言われていたし、自分でもそれはわかっている。だからこそ、昨日今日と表情管理をしていたつもりだったが、効果はなかったようだ。

「黒川からも、大体の様子は聞いているわ。本当に、しょうがないわね。もっと人当たりをよくしてもらわないと……。そのために、取引先巡りをさせているのに、効果がないうね」

優子曰く、ここ何カ月かにわたり、自分がやってきた仕事を少しずつ斗真に引き継いでいるのだという。内容は主に対外的な交渉などで、以前より外回りの仕事が増えたのはそのためであるらしい。

「放っておくと、研究所に入り浸るから困ったものだけわ。将来、この会社を背負ってい

く者として、いつまでも今のままじゃいけないのに。……やっぱり、大々的に意識改革をする必要があるようね」

優子が、微笑んだまま小さく肩をすくめた。

彼女に手招かれ、芽衣は立ち上がって優子のすぐそばに立った。座面を掌で示され、彼女の隣に腰かける。

「佐藤さん、ここからは社長としてではなく、斗真の母親として話すんだけど——」

優子が唇に人差し指を添えて「内緒」のジェスチャーをした。

「はい、なんででしょうか」

芽衣が居住まいを正すと、優子はやや声のトーンを落として話し始める。

「先日も話したとおり、斗真は『冷淡』で『毒舌家』で『気難しい』。彼自身もそれをわかっていると思う。でも斗真は、この間も言ったとおり本当は優しい子なの。だけど、基本的にあまり人が好きじゃないのよ。人間嫌いと言うのか……女性を嫌っているの。もちろん、ビジネスをする上ではうまく隠しているし、今のところ支障ないわ。でも、うちは化粧品メーカーだし、社内外ともに女性と接する機会が多いでしょう？」

「エゴイスタ」は男性化粧品も扱ってはいるが、メインは女性向けのラインナップであり、世間的にもそちらのほうがよく知られている。

それに、化粧品メーカーの多くがそうであるように男性社員よりも女性社員の比率が

高い。

「普段から私以外の女性は、必要がない限りそばに寄せ付けない。それもあって、斗真が直接関わっている部署に女性社員は一人もないの。うちの会社には優秀な女性がたくさんいるのにもかかわらず、よ」

「エゴイスタ」は事あるごとにメディアに取り上げられるほど、女性にとって働きやすく活躍の場が多い会社だ。実際に、役員の五割近くが女性であり、役職者も多い。

「もちろん、男尊女卑思想ってわけじゃないのよ。意図的に遠ざけているというのも違う気がするし……なんというか……斗真のあれは、嫌いを通り越して恐怖を感じていると言ってもいいくらいなの」

「恐怖……ですか？」

「そうよ。大袈裟おおげさかもしれないけど、『女性恐怖症』のようなものなんじゃないかと思ってるの。誰が見てもそうだってわかるレベルではないけれど、よく見ていたらわかるわ」

優子の顔には、いつもどおりの微笑みが浮かんでいる。しかし、眉尻は下がっており、強い憂うれいが感じられた。

「あの子もいい年だし、これまで何人かの女性とお付き合いはあったみたい。だけど、誰一人本当の意味で斗真のテリトリーに入れた人はいなかったようね。しかも、年々女性と縁遠くなって、ここ二年くらいは仕事ばかりしてデートなんか一回もしてないん

じゃないかしら」

突然斗真のプライベートの話になり、芽衣は少なからず面食らった。斜め前に座っている黒川は、すべてを承知しているのか穏やかな表情を浮かべたまま微動だにしない。

「それでね、佐藤さん。あなたには、今回の密着取材のついでに、是非やってもらいたい事があるの」

真剣な表情で言われ、芽衣は緊張で顔が強張こわばるのを感じた。そんな芽衣の手を、優子が取ってしっかり握ってくる。

「……はい。私でできる事なら、なんなりとお申し付けください」

「ありがとう。そう言ってくれて嬉しいわ。では、改めて依頼するわね。佐藤さん、あなたに斗真の『女性恐怖症』を治してもらいたいの」

突拍子とつぴょうしもない事を言われ、芽衣は思わず驚きの表情を浮かべた。

「私が、副社長の『女性恐怖症』を治す!? で、でも、いったいどうやって……」

「それは、あなたに任せるわ。手段は選ばないし、あなたのやりたいようにやってください構いません」

「ですが、私、あまり男の人に詳しくなくて……というか、まったく知らないし、もっと言えば、今まで男性と付き合った経験がなくて、つまり恋人がいた事がないんです」

まさか、こんなところで自分の恋愛経験ゼロを暴露する事になるとは……

芽衣は恥じ入って、肩を窄めた。

彼氏いない歴二十五年の自分に、そんな大役が務まるはずがない。何より、普通の男性ならまだしも、斗真はハイスベックである上に超がつくほどのイケメンなのだ。

自分程度の者がそんな人の「女性恐怖症」を治そうなど、おこがましいにもほどがある。芽衣の戸惑いをよそに優子は満足そうな表情を浮かべて頷いた。

「実はね、話していて、そうじゃないかと思っていたの」

「へ……？　そ、そうじゃないかって——」

「男性を知らない——だからいいのよ。もしあなたが、男性を知り尽くしているような女性なら、こんな事頼まないわ」

「で、ですが——」

「斗真の『女性恐怖症』が治れば、彼の間嫌いも自然と解消されるだろうし、それは『エゴイスタ』の明るい未来にも繋がると思うのよ。佐藤さん、あなたの肩には、我が社の将来がかかっているわ。心して取り掛かってね」

今一度ギョツと手を握られ、にっこりと微笑まれる。

「は……はい、最善を尽くします」

期待を込めた顔で目をじっと見つめられ、さすがに断る事などできなかつた。

「でも、どうして私に、そんな大役を任せてくださるんですか？」

「もちろん、佐藤さんと話してみて、あなたならお願いできると判断したからよ。あなたは、人を見かけや噂だけで判断しないと云ったわ。それに、あなたの事は、入社してすぐここに来てくれた時から、強く記憶に残っていたの」

「えっ？　あの時の事を、覚えていてくださってるんですか？」

「もちろん。素直で元気いっぱい、明るくて前向き。それもあって、今回の企画を佐藤さんにお願しようと思ったのよ」

一平社員の自分に、それほど信頼と期待を寄せてくれているとは……

芽衣は大いに感動し、自分を見る優子を見つめ返した。

「私、精一杯頑張ります！　きつとやり遂げてみせますから」

芽衣がそう言うのと、優子が嬉しそうに微笑み、手をギョツと握ってきた。

「よかつた。あなたなら、そう言ってくれると思ってたわ。これは『副社長密着取材』と並行して行われる極秘任務よ。どちらも仕事の一環であり、斗真自身の未来を大きく左右するかもしれない重大な任務だという事を忘れないで」

にこやかだった優子が、そう言いながら、ふいに真剣な表情を浮かべた。

「それと、念のため言っておくけど、斗真に恋愛感情を抱いたりしないようにね。『女性恐怖症』を治す方法はあなたに任せるけれど、間違っても恋をしちゃダメよ。これは、あくまでも任務である事を忘れないで。そうでないと、あなたが傷つく事になりかねな

いわ。いいわね？」

「わ、わかりました……」

「結構。では、よろしくお願いね。——黒川室長、あとは任せたわ」

「はい、社長。では、行きましょう」

黒川がソファから立ち上がり、芽衣もそれに続いた。彼に連れられて社長室を出て、そのまま副社長室に向かう。

「黒川室長……。私、大丈夫でしょうか？」

やり遂げると啖呵を切ったものの、芽衣は今さらながら不安になり、黒川にそっと訊ねた。彼は芽衣を見て、微笑みながら頷く。

「社長の人を見る目は確かですし、きっと大丈夫です。何かあれば私に相談してください」

「はあ……。よろしくお願いします」

芽衣がそう言った時、黒川が副社長室のドアをノックした。中に入り、デスク前に立っている斗真と対峙する。

「遅い。時間ギリギリまで、何をしていたんだ？」

彼はそう言い放つと、二人の間をすり抜けてドアに向かった。

芽衣は黒川とともに彼のあとを追い、エレベーターホールでようやく追いついて立ち止まる。

「お待ちせして申し訳ありません。今日は車でお出かけになって、そのまま直帰なさるんでしたね」

「そうだ」

階下に向かうエレベーターが到着し、芽衣は先に乗り込んで斗真を待つ。彼が芽衣の横を通り過ぎて、エレベーターの奥に進んだ。

「承知しました。では、私はこれで。佐藤さん、あとはよろしく——」

エレベーターホールに立つ黒川が、閉じたドアの向こうに消えた。見送ってくれた彼の表情が、やけに意味ありげだったような気がする。

それにしても、沈黙が気まずい。

元来お喋りな芽衣は、誰かといると用がなくても何かしら話しかけたくなる性分だ。

しかし、必要以上に話しかけると言われている以上、迂闊に口を開くわけにもいかない。

エレベーターは止まる事なく下降し続け、地下一階の駐車場に到着する。先に降りた斗真のあとをついて歩き、黒いセダンタイプの車の前で立ち止まった。

「乗って」

斗真が短く言い、助手席のドアを開けてくれた。

「あ、ありがとうございます」

芽衣は礼を言い、運転席へ回る彼の背中を目で追った。斗真の態度はこの上なくそつけない。しかし、ドアを開けるタイミングや座るよう促す動作が、実にスマートで紳士的だ。

(きつと、女性をエスコートし慣れているんだろうな)

確かに、冷たい感じはする。けれど、優子から聞かされていなければ、とてもじゃないけれど彼が女性を嫌悪し、恐怖を感じているとは思わないだろう。

シートベルトを締めた芽衣を確かめたのち、エンジンをかけた車がゆつくりと動き出した。二人とも一言も喋らないまま車は走り続ける。

ものすごく気づまりだが、斗真からの言いつけだから致し方ない——

芽衣は固く口を結んだまま、沈黙を守った。車が赤信号で止まると同時に、芽衣のほうを見た斗真が、おもむろに口を開く。

「今日は、昨日とまるで印象が違うな。服装もヘアメイクも簡素だし、視界の端にあつても、さほど邪魔にならない」

「恐れ入ります」

「昨日僕が言った事を的確に捉えて実行に移しているのは評価に値する」

斗真に褒められた！

ホツとした芽衣は、朝からの緊張をいくぶん解いて表情を和らげる。

「ありがとうございます！ このパンツスーツ、昨日デパートに寄って買ったんです」「そうか」

「色は紺かグレーで迷ったんですけど、香苗が——あ、香苗って私の高校の時の友達で、デパートで働いている子です。その子が、グレーのほうが着回しがきくって言うし、紺だと就活生みたいかなって」

すでに正面に向き直った斗真が頷いて、同意する。

「ですよね？ よかった、やっぱり正解だったんですね。取材で副社長のお供をする事もあるだろうと思って、結構奮発したんです。洋服って着る人によって違って見えますよね。私レベルだと、ある程度いいものじゃないと、値段以下に見えたりして——」

「うるさい！」

一喝され、芽衣はハツとして口を噤んだ。

「す、すみません。つい——」

「取材をするのは許可した。だが、今みたいなくだらないお喋りはご法度だ。いいな？」

「はいっ、すみません！」

「取材は可能な限りテンポよく進めてくれ。そうすれば、一カ月かからずに仕事を終わらせるだろう？ 見てのとおり僕は忙しい。こんな取材はさっさと終わらせたいし、少しでも早く今の状況から解放されたい——つまりは、そういう事だ。君もそのつもりで、

動いてくれ」

信号が変わり、車が再び走り出した。

芽衣は「はい」と言って頷き、早々にバッグからメモ用紙とボイスレコーダーを取り出した。

「録音してもいいでしょうか？」

「どうぞ」

許可を得て、録音のスイッチを押す。

芽衣は斗真のほうに身体を向け、彼の横顔に視線を置いた。流れる風景をバックに、彼の完璧な顔のラインが浮き上がって見える。

それにしても、なんて整った顔だろう——うっかり見惚れてしまい、芽衣はあわててメモ用紙に視線を落とした。

（何やってんの！ こんなんじゃ、百の質問をするだけで一カ月が終わっちゃうよ！）
芽衣は自分自身を叱咤し、活を入れた。

「では、始めさせていただきます。副社長は、普段ご自身で運転して外出先に向かわれるんですか？」

「そうだ」

「運転するのが、好きなんですか？」

「そうだな。運転している間は、誰にも邪魔されずに済むし、一人になれるからな。もつとも、今は、まったくそうじゃないが——」

はい、出た。人間嫌い。

さっそく嫌味を言われて、ふと顔を上げた。

すると、ちょうど左カーブを曲がろうとする斗真と視線が合う。一瞬、流し目を送られていたような気分になり、図らずも鼓動が激しくなる。

「そ、そうですか。副社長は、一人の時間を大切にされているんですね」

「人がそばにいると気が散るし、落ち着かないんだ」

「それは、誰でもですか？ 例えば、家族とか恋人とか……」

「恋人なんて、一時的に関係しただけの他人だ。それに、家族といえども結局は個人の集まりだし、ただの入れ物にすぎない」

「副社長って、結構クールな考えをお持ちなんですね」

「別に、普通だろう。誰だって、自分の時間を邪魔されたくない。君だってそうじゃないのか？」

「それはそうです……」

言われてみれば、そのとおりだ。

さっきは即、彼の間嫌いが出たと思ったが、短絡的な判断だったと反省する。

「では、副社長が孤独や寂しさを感じる時は、どんな時ですか？」
 「そんな時はないな。孤独は心の平穩を呼ぶし、寂しいという感情を持ったのは、もう遙か昔だ」

「昔……ちなみに副社長は、どんなお子さんだったんですか？」

「さあ、子供の頃の事なんかもう忘れたし、思い出したくもない」

話す彼の横顔に、さっと影が差した。

考えてみれば、斗真の両親が離婚したのは彼がまだ子供の頃だったと聞いている。詳しい事はわからないが、幼少期については触れられたくないのかもしれない。

「あの、副社長——」

「そろそろ目的地に着くぞ。インタビュは、いったん終わりだ」

斗真が、ふいにそう言って左にハンドルを切る。少々荒い運転だったせいか、シートから背中を浮かせていた芽衣は、遠心力で斗真のほうに倒れ込んでしまう。

「あっ——」

シートベルトのおかげで即座に体勢を持ち直したが、彼のジャケットの左腕にファンクションが薄くついてしまっている。

「す、すみませんっ。袖が——」

芽衣はポケットからハンカチを取り出し、袖の汚れを拭こうとした。しかし、ちょう

立ち読みサンプル はここまで

ど車が建物の駐車場に入るタイミングと重なり、思うように動く事ができない。

車が停車し、芽衣はようやくシートベルトを外して車外に出る。先に降りて歩き出す斗真を追い、ジャケットの袖についた汚れを拭こうとした。

「副社長、待ってください。袖に汚れが——」

「触るな！」

芽衣がハンカチを持った手を近づけた途端、斗真がその手を払いのけた。

手にしたハンカチが宙を舞い、駐車場の床に落ちる。

ハタと目が合った彼の目は驚くほど冷たかった。

芽衣はたじろいで、頬を引き攣らせる。

「も……申し訳ありません……！」

芽衣は咄嗟に落ちたハンカチを拾おうとした。しかし、それよりも一瞬早く動いた斗真に先を越されてしまう。

「いや……すまない。急に大声を出して、悪かった」

斗真が早口でそう言い、芽衣にハンカチを差し出した。芽衣を見る彼の顔には、戸惑いの表情が浮かんでいる。

「いえ、私こそ、すみませんでした」

ハンカチを受け取る時、ほんの少しだけ二人の指先が触れた。その途端、斗真の手に